野鳥と自然第10号付録…第2回「伊豆沼セミナー」に参加して

コハクチョウの故郷チヤウン湾を訪ねて

谷　口　明　郎

主催者　伊豆沼の自然を守る会，ガンを保護する会共催

日　時　1988年1月16日　午後7時30分から9時30分過ぎまで

場　所　はさま会館（宮城県若柳町南大通り）

講　師　長谷川　博（東邦大学生物学教室，理学部講師）海鳥特にアホウドリの研究家として知られている

以下は長谷川　博さんのお話から書き取ったものである（注＝谷口挿入）。

東海テレビ取材班とはモスクワで合流，取材班＝ディレクター梅木健三，カメラマン長谷雄哲也，堀川正義，レポーター川津祐介。ソビエト側，ベリコフさん（ソビエト中央テレビ国際局，交渉や通訳を担当），カメラマンのムラビヨフさんの一行7人。

7月10日昼，モスクワ発，離陸後3時間半でエニセイ川の河口に近いノリリスク空港給油，待ち時間にトウゾクカモメ，シロハラトウゾクカモメ2羽，イワツバメ3羽飛んでいるのが見られた。

離陸3時間40分でペベク空港（チヤウン湾東岸ぞいの北）に着陸，降りる時，眼下の雲の切れ間から黒々とした海が見え，流氷が点々と，沖の方は白い氷の海であった。迎えのバスでペベク市街のホテルへ，ホテルを出て海岸に行くとあちこちにセグロカモメがいた，ミツユビカモメもいた，現地時間の24時，太陽は水平線の上をゆっくり横に進む，白夜である。

明くる朝9時に空港に行ったが，霧の晴れるのを待って11時過ぎ，大型ヘリコプターに機材とともに乗る。高度を低くチヤウン湾の東岸に沿って南へ飛ぶ，東側にはツンドラが広がり海には所々流氷が浮かんでいる，川が大きく蛇行，池沼の形，水の色が微妙に異なる，地表は緑，この緑の下に凍土があるとは思えない。湾の奥に近付くに従いツンドラの大地に描かれる水と土の不思議な模様が多くなる。（注1）

太陽の光がさし緑は鮮か，大小無数の池沼に青空がうつる，白い点々が大きくなる。100羽以上のコハクチョウ，（注2）ヘリコプターの音に驚いて飛びたつ。

それから直ぐ，川（チヤウン川）べりに集落が見える，ルトウクチの街だった。（注3）それから10分程で川のほとりに一群の建物が見える，それがチヤウン，ステーションだった。ペベクから一時間程，距離にして200㎞，チヤウン湾は東京湾の2倍位の大きさで湾の最奥部には大小無数の川が流れ込んでいる。

チヤウン，ステーションは，チヤウン野外生物学研究施設。ソビエトでは北方生物問題研究所が組織され，ツンドラの生態系とそれに対する人間の影響などが研究されている。ソビエトの極北ツンドラ帯に14か所ある。チヤウン，ステーションもその一つでマガダン州立の施設である，研究者とその家族16人が生活していた。多い時は30〜40人が滞在すると言うことで，一行はここに泊めて貰う。（注4）

チヤウン，ステーションは氷の解け始める5月12日から結氷の始まる9月15日まで開設されている。但し管理責任者は冬もここで生活している。

私はロシア語を話せない，少し分かったことを紹介する，ここの女性3人のチームは，シベリアレミ

ング（ネズミの一種）個体群の周期的変動を共同で研究していた，一人は食物である植物の生産量と栄養分，一人はレミングの個体数密度と行動，もう一人はレミングを解剖して栄養状態や内分泌系の調査別の女性は魚類の体内寄生虫の研究，男性研究者は昆虫の研究，残念ながら鳥類の研究者はいなかった。

ホテルの食事も美味しかったが，このステーションの食事も良かった，食事の準備は当番制，トナカイの肉も食べたが，黒パンにバターを薄くのばしてスモークサーモンの薄切りをのせたものは旨かった。

ここでは，終日火力発電機にたより各棟に電気が供給され，発電機の冷却水はスチームとなりホースで各棟に送られ暖房に使われている。またそれで水を沸かし給湯している。水は近くの池からポンプで汲上げ階上のタンクに貯水されている。

チャウン湾付近には７月12日から23日まで10日間いたが，自由に行動できたのは４日間であった。このステーションには７月12，13日と19，20日の４夜泊めて貰った。

ステーションに着いて昼食をとった後，長靴を借り研究員の案内で初めてツンドラに足を踏みいれる，最初にカナダヅルが見付かった。５羽の群れ，外にも６羽，草地で採食していた，はるばるベーリング海峡を越えて来て繁殖しているのであろう。

遠くの池にコハクチョウのつがいが見えた，望遠鏡で見ると５羽の雛が草かげに見える，少し遠いがはじめて見るコハクチョウの親子，感激であった。

夕食後，21時過ぎからまたツンドラに出る，白夜のうすあかりの中でキョウジョシギが鳴く，キョクアジサシやセグロカモメが飛び，コオリガモが小さな池で雛を連れて泳いでいた。

滞在中に確認した鳥類は37種であったが，自分で撮影出来たものを紹介する。

（セミナー参加者にスライドで紹介された鳥類は次の通りである）

キョウジョシギ	シロエリオオハム
クビワカモメ（珍しい）	シロカモメ（少ない）
セグロカモメ（多い）	シロハラトウゾクカモメ
クロトウゾクカモメ（白鳥の敵）	キョクアジサシ（雛への給餌の様子）
タカブシギ	オジロトウネン
ソリハシシギ	オオハシシギ
ハジロコチドリ	ダイゼン
コオリガモ（雌抱卵８〜10個）	アカエリヒレアシシギ
ハイイロヒレアシシギ	メガネケワダガモ
カナダヅル（20羽）	ハクセキレイ
ムネアカタヒバリ	ツメナガホオジロ（家の近く多し）
ユキホオジロ	ミツユビカモメ（岩山のコロニー）
ツメナガセキレイ	コハクチョウ（抱卵，卵，近接撮影）

コハクチョウの繁殖

コハクチョウの営巣と親子の撮影は，取材班にとって最重要課題であった。

ステーションの研究員が，コハクチョウの巣の場所を知っていると言うので案内して貰ったが，既に

卵は殻だけになっていた，前に５羽の子連れつがいを見付けた所から500～600ｍ離れた所に１羽いた。この鳥は頭から首にかけて薄い赤味のある黄色に染まっていて，繁殖個体らしく思われた。じっとしてこの鳥をみていると，大きな沼の方から別のコハクチョウが飛んで来てその近くに降りた，200ｍくらいまで近付くと突然１羽が飛びたち低く飛んできた。

巣と卵があるのかも知れないと思って，双眼鏡でマウンド状になっている巣らしいものを見付け，更に近付いていくと，飛んでいたコハクチョウが地上に降り，首を伸ばして歩き，時々翼を半開きに警戒している。マウンドに近付き，10ｍくらいのところから卵を確認した，姿勢を低くして巣から遠ざかった。親鳥は間もなく巣に座った，親鳥の落着くのを見計って30ｍ離れてブラインドを張った。結局，19日の18時頃巣に近付いて５卵であることが確かめられた，どの卵にもヒビ割れはなく産卵が遅れたものに違いない。

抱卵中のコハクチョウの体のあちこちに蚊がとまって血を吸い，吸おうとしていることが分かった。（注５）近付いて見ると，嘴の基部や額などに沢山の蚊がとまって血を吸っていた，ヤブカの一種である。私が近付いて行くと，コハクチョウは警戒して立ち上がった，するとたちまちその足に蚊が一杯たかって刺しはじめた。白い羽毛の上にもあちこちに蚊がとまっていたコハクチョウは蚊にあちこちを刺されながら抱卵を続けているのである。

ステーションで迎えた初めての朝，部屋の窓から約１キロメートル先の池にコハクチョウのつがいがいるのを見付け，そっと近付く，非繁殖のつがいであろう，１羽は地上で草を食べ，もう１羽は水面で頭を低くし，嘴を素早く動かして水面近くを飛んでいる蚊を捕えていた。（スライドで紹介された）

試しに，コーイ，コーイと呼んでみた，すると２羽はだんだん近付いて来た，ときどきコウッ，クウッと小声で鳴きながら，日本で餌を貰う時のことを覚えているのであろう，何も餌をやらなかった為かしばらくすると少しづつ遠ざかって行った。シベリアで，コハクチョウとちょっと話が出来て嬉しかった。

チヤウン，ステーションでの２日目の朝，食事前にツンドラに出かけた，快晴で暖かい，こんな時は蚊の大群が襲ってくる。蚊取線香は用意していたが役にたたないと思い使うのをやめた，網付きの帽子が大いに役立った。（注５参照）ツンドラの地面の少し高い所は乾燥していて太陽に何時も照らされているために非常に暖かい。腰を降ろすと，ふっくらと暖かく気持ちが良い，数十センチ下が凍土だとはとても思えない。

この日，朝食の後ステーションの研究員に，モーターボートで約30分河口部に近い湿地にあるカモメ類のコロニーを案内して貰う。池の真中の小さい島にセグロカモメ約200羽，シロカモメ約30羽が集っていた，巣には卵があり雛も見られた。

昼食後もツンドラに出掛ける，直ぐクビワカモメが見付かった，４羽が私に向かってギジギジと濁った声を発して急降下攻撃してきた，この後なんどもクビワカモメに出会った。浅い水面に浮いて，首を突っ込んで甲殻類をくわえあげ食べていた。

チヤウン湾には，明るいバラ色の非常に珍しい「ヒメクビワカモメ」がいると聞いていたので何とかして見付けたいと思ったが，駄目だった。チヤウン湾はこの種の繁殖分布域の東のはずれである。

ミツユビカモメは，ペベクからヘリコプターで15分のところに約2,000羽からなるコロニーがあった，海岸の断崖の棚に密集していた。

7月14日，チヤウン，ステーションからモーターボートで川づたいにルトウクチの街へ向かう，約1時間で着いた。ここは，トナカイ遊牧民の基地である。人口は数百人，ツンドラの中にぽつんとある。ペベク市との交通は大型ヘリコプターによっている。冬の間は雪上車で自由に行き来できるが夏は航空機に頼らざるをえない。

ここに着いて直ぐ，取材チームはコルホーズの議長と打合せをした，その会話のなかで議長は，コハクチョウならこのあたりに3,000羽くらいいて，2㎞も行けば沢山見ることが出来ると説明していた。後で地図を見て，その場所は最初の日100羽以上のコハクチョウを見たところであることが分かった。（注6）明くる15日朝，朝食後，コハクチョウが集っていると言うところへ案内して貰った。空はきれいに晴れ，夏も真盛り，池塘にはお花畑が赤，白，黄色，短い夏の太陽を一杯に浮け，燃えつきようとしているように思えた。干上がった池にはコハクチョウの足跡がいくすじも残っていた，人の親指ほどの太さの大きな糞もあちこちに落ちていた。（注7）

前方遠く白い点々がいくつも見えた，双眼鏡でみるとコハクチョウにシロカモメである。近付くとなん羽かが飛び立つ，飛び立ったコハクチョウは小群を作り，上空を大きく旋回，澄切った大空に白い大鳥が輝いて，ため息が出るほどの美しさ，こんな光景は二度と見ることができないのでは，と思った。このあたり一帯はチヤウン湾の奥の低地で，8月の大潮の満潮時には海水をかぶり，その時に栄養分が補給され生物相が豊かになり，そのために鳥の種類も数も多かった。

ルトウクチの街の少年たちはマンモスの牙を見せてくれた。近くの川岸で拾えるとのこと，ヘリコプターで約15分で，マンモスの骨が出土すると言う場所に着いた。夏，川の水が増し，土を削って流すと骨が出る。河岸は5〜6㎞の高さに削られていた。辺りに白い花をつけたキク科のラマーシュカが咲乱れ，また別の草花が丁度日本の菜の花のように黄色の花が一面に咲いていた。花に囲まれて，皆で捜した。大きな牙は無かったが，ケブカサイの骨片，マンモスの牙の断片，歯の断片が見付かった。

私たちはまた，ルトウクチから山岳方面にヘリコプターで1時間ほどの所に生活している「チュクチ人」の小集落を訪ねた。トナカイ遊牧民で（注7）現在でもトナカイの皮で作った移動式テントの家で生活している。この家を「ヤランガ」と言う。

チュクチ人は，日本人と顔かたちは非常によく似ていて，表情に親しみを感じた。同じアジア系の民族である。言葉は全く理解出来なかったが，何となく意思が通じているように思えた。

そこから更に10分程の所に，トナカイ約3,800頭の群れがいた。この群れと共に移動している人は1日に30キロも歩くことがあると言う。また冬はトナカイがシベリアオオカミに襲われないように，寝ずの番をするという，大変な仕事だ。

チヤウン湾での滞在期間はあっという間に過ぎ，7月24日の朝，私たちはペベクからノリリスクを経由してモスクワの近くまで，飛行機はソビエト北辺上空を飛び続けた。眼下に広がるツンドラを眺めつづけた。大蛇行する大河をいくつも越え，散在する無数の池沼を後にした。どこまでもツンドラが続いている。その大半は手つかずの大自然だ。そこでは短い夏の間，チヤウン湾で見たと同じような生き物たちの活発な営みが行なわれているに違いなかった。

こんな広大な大自然が残されているからこそ，日本列島には毎年，沢山の冬鳥が訪れ，旅鳥が通過していくのだと納得した。1987年の夏，私は多くの方々のおかげで夢のような日を送り，何にも代えがたい体験をすることが出来た。深く感謝しないではいられない。そしてツンドラの大地と大白夜に乾杯

したい。　　終　り

注

1. 飛行機またはヘリコプターから撮影された数多くの素晴らしい風景が紹介された。
2. 繁殖の機会を得ない成鳥や亜成鳥の集団と思われる。
3 ルトウクチの街はトナカイ遊牧民の基地。トナカイの遊牧は，アラスカの北辺とシベリアのチュコト半島からスカンジナビア半島に至る北極海に面した北辺に発達してきた。純粋のトナカイ遊牧民は今ではここだけと言うことであった。
4. ソビエト科学アカデミー極東科学中央機関北方生物問題研究所の上級研究員であるコンドラチエフから，私は直接お話を聞いたことがあるので，コンドラチエフさんに会えたのか，と尋ねたところ長谷川さんは会わなかった，マガダン（オホーツク海に面した街）におられるらしい，と言うことであった。
5. 昔私は，シベリアの北緯60度近い農場で４度びの夏を，物凄い「ブユ」の発生に網を被って過ごした経験があるので，「ブユ」はいなかったか，と聞いてみたが長谷川さんは，いなかったと応えた。発生時期，また発生地域の水質に関係するものと考えられる。私はシベリアで蚊に悩まされた覚えはない。
6. 福島県は，日本で一番多くのコハクチョウが渡来するところである。馴染みの深い（０２２Ｃ）や（０１４Ｃ）は，このチヤウン湾で標識をつけられたものである。阿武隈川や猪苗代湖で越冬するコハクチョウの多くは，チヤウン湾付近で繁殖するものと考えて大きな間違いはないのではなかろうか。
7. ハクチョウも本来の自然の餌を採っている限り，糞便も堅くかたまっているが，パン屑など加工餌をやたらに与えると水便となり，不健康になる。鶏に見る通りである。

追記　この報告は，映写される200 枚にも及ぶスライドフィルムの画面を，見ながら聞いた長谷川博さんの話のあらましである。まとめるにあたり，話の前後関係，日時，場所，固有名詞などについて，アニマ（動物雑誌，平凡社発行）1988 年１月号に掲載された長谷川さんの手記を参照し，正確を期したつもりである。

1988・1・20，記